



Title	有珠岳の噴火
Author(s)	河野, 常吉
Citation	札幌博物学会会報, 5(2), 127-132
Issue Date	1914-06-13
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/60880
Type	article
File Information	Vol.5No.2_007.pdf



[Instructions for use](#)

有 珠 岳 の 噴 火

河 野 常 吉

ERUPTIONS OF THE VOLCANO USU.

By

TSUNEKICHI KONO.

有珠岳の噴火を記するに當り先づ地勢の大要を述べんに、同山は膽振國有珠郡伊達村大字有珠村にありて東は同村大字長流村に跨り、北は洞爺湖に臨み、西は虻田郡虻田村に接す。全體不規則なる圓錐狀を成し、山巔は大なる舊火孔にして其南壁を南屏風山、北壁を北屏風山と云ひ、其内部は火口原たり。火口原の東部、外輪山にかけて一の大なる突起あり。之を大有珠岳と稱す。アイヌは之を「アシリュブリ」と云ふ、即ち新山の義にして、嘉永六年噴火の際生成したるものなり。其高さ海拔千九百六十四尺、之を當山の最高點となす。大有珠岳と相對して火口原の西部に又一の突起あり、之を小有珠岳と稱す。アイヌは之を「フシコヌブリ」と云ふ、即ち古山の義なり。其高さ海拔千九百十四尺とす。小有珠岳の南西に火口瀬あり、「ワツカサンケピンナイ」と云ふ。文政五年噴火の際虻田部落を壊滅したる押出しは蓋し此處より起りたるものなり。

「此山は古來屢々噴火せり。北海道志卷の六(地理)山の部に曰く「慶長十六年冬十月噴火し、後寛文三年七月十五日、文政五年閏正月共に噴火し、安政元年又少く噴火す」と。此記事寛文三年文政五年の噴火は事實なるも、其間に明和五年の噴火を脱落せり。又安政元年とあるは嘉永六年噴火の誤なり。慶長十六年の噴火に至ては絶えて他書に見えざるのみならず、同じ北海道志卷の三十五(雜記)噴火の部にも亦之を記せず。因て其出處を考へしに、此記事は舊記に據りしものにあらず、大抵戸長役場若しくは郡役所の調査報告したるものならんと察し、有珠郡開拓の率先者にして公私共に同地方の事に關係せし田村顯允翁に質せしに翁

曰く、正確には記憶せざるも、自分等移住當時、虻田の牧場(文化以來の官設牧馬場)の頭取に戸田悠次と云ふ人あり、此人に就きて種々の事を取調べ有珠岳噴火の事をも聞きたりしが、其噴火年代の如きは固より精確と云ひ難ければ、それ等より誤謬を生ずるに至りしにあらざる歟と。蓋し然らん。因て予は慶長の噴火は更に他に證據の發見せらるゝ迄は之を正確と認めず、暫く之を抹殺し、寛文以後の噴火に就きて記する所あらんとす。

寛文三年の噴火

此時の噴火は或は七月十四日となし、或は七月十一日となす。即ち(甲)は松前家より幕府への届書並に松前年々記に記する所にして七月十一日より同月十三日まで間斷なく少しづゝ地震、十四日明け方より大に噴火せり。又福山舊記には單に七月十四日宇須岳焼出づと記せり。(乙)は福山秘府にして七月十一日大雨洪水、東部宇須岳發火、雷鳴甚烈、同月十四日宇須岳又發火と記し、嚴有院實記には十一日より焼出し云々と記せり。以上の二説其何れが正確なりや斷言し難しと雖も、幕府への届書は比較的正確なりと認むべく、又此山の習性として噴火前地震を發するの癖あるを以て、(甲)は従ひ十一日より地震、十四日噴火せりと云ふを可とすべきに似たり。十五日は震動最も甚だしく山海鳴渡り降灰夥しく、附近の蝦夷家は焼け或は埋りアイヌ五人立退くこと能はずして死亡せり。山巔は十の八九まで崩壊せり。同日晝八つ時(午後二時)燒山より夷の形に似たる長一丈許の物具騰せしに南北より光り物飛び來りて之を引き落すと見ゆるや、山は二つに破れて大に震動せり。アイヌは煙中の火光と震動の夥しきを以て神軍の所爲となし恐怖惑亂すること甚だし。降灰は有珠より松前の方、即ち西方海上二日路の間、汀より沖へ二千七百間餘を陸の如く埋め、尙其沖は足場柔かにして歩行し難きも、浪打際も見えざるまで遠く覆ひたり。折しも南風にして福山地方へは灰は降らざりしが、鳴動の音は羽州庄内邊まで聞えたり。而して松前年々記には七月末まで鳴止まずと記し、福山秘府には月尾に至りて漸く止むと記せり。

明和五年の噴火

寛文噴火の後百五年を経て明和の噴火あり。松前年歴捷徑には明和五年十二

月東部宇須岳壞崩、夷人畏怖避彼地と記し、函館の人逢坂七兵衛の日記には十二月十六日臼山燒申候と記せり。噴火の狀況は詳かならずと雖も、被害はなかりしと察せらる。

文政五年の噴火

明和噴火の後五十四年を経て文政五年の大噴火あり。其狀況は當時有珠善光寺に在りし役僧某の日記に明瞭なり。其大要を記せん、閏正月十六日午前二時より朝まで地震凡そ三度。十七日地震晝十四五度夜凡そ三十度。十八日地震三十四五度、地響き凡そ四十度。去夏洞爺湖の水餘程減少せるが先年噴火の際も同斷の由なれば旁々以て噴火の前兆なるべしと老夷申す由。十九日晴、北西風、地震晝頃迄に百度許、午後二時有珠岳夥しく鳴動噴火し、土烟を吹上げ電光を發し其光景魂を消すばかりなれば本尊並に什物等船に積入れ、山主其外之に乗りてフレナイに至り尋でベンベに避難す。二十二日午前三時頃より噴火烈しく火の玉の四方へ散亂すること百萬の流星火を打上ぐるが如し、此夜までに過半燒崩れたる様子。モロラン支配人來る同地は灰五寸許積り白晝も樺皮を焚き居る由。二十三日噴烟は少し穩なるも地響き間斷なし。二十六日夜頻に鳴動し猛火燃上り、二十七日曉甚だ烈し。二十九日烟大に薄らぎ唯震動のみ。二月朔日朝鳴動地響恰も百千萬の雷電一時に落るが如し。猛火前山一面に溢れアブタに押出し、家屋より草木に至るまで押倒し燒拂ひ、牧士村田卯五郎同紋太郎、虻田場所支配人松之助其他和人夷人の死亡あり。虻田場所請負人と田屋茂兵衛、同雇人善五郎及同所に來合せ居たる白老場所支配人彦右衛門は燒爛れて半死半生となり、戸板に乗せてフレナイに收容せられしが茂兵衛、善五郎の二人は遂に死亡せり。二日噴烟するも地動は少し穩かなり。三日アブタ、フレナイ邊和人夷人殘らず引拂ひ往來を止む。六日黒烟夥く昇り電光りの様子恐るべし。九日大地震(十日以後記録を缺く)。

上に記する如く二月朔日の變には、虻田會所及牧士の住宅を始め虻田土人部落は全滅したれば、其後は會所及土人部落を西方約二十町のフレナイに移して同所

を蛇田と稱し、舊蛇田部落の所在地をドコタンと稱せり。ドコタンは即ち廢村の義なり。

嘉永六年の噴火

文政噴火の後三十一年を経て嘉永元年の噴火あり。其噴火の狀況は、明治二十八年予該地方巡回の際、蛇田の古老にて噴火の當時其實況を目撃したる川又專太郎氏より聞きたれば之を記さん。同年三月十五日蛇田に地震八回あり。正午頃有珠岳噴火せり。是より先き三日間東風にて雷鳴あり。鵠川の土人にて占を善くするアリマサといふ者此日の噴火を豫言せるよしにて、十五日朝船頭役の佐之助と云ふもの「今日は山が抜けるから逃げるがよい」と言ひ出し、ドコタン

岳珠有小



(載所會圖山名)間年政寛

岳珠有大

岳珠有小



圖取見年三十四治明

に在りし人々は蛇田に避け來れり。井の水は其味鹽辛くなれり。有珠善光寺の僧侶が寶物等を携へ船に乗りて蛇田に來りし故、專太郎は其船に上乘して禮文華に至り、上陸して僧侶に晝食を供するや否や、轟然鳴り響きて有珠岳噴火したり。是より專太郎は蛇田に歸りしに、三日間は晝も暗き程なりき。山頂より噴出する烟は晝は白き圓柱の如くなるも、夜は赫灼として赤く、其間に噴上げられて降下する岩と噴上げらるゝ岩と衝突して烈火を發し光景いと凄まじ。噴火の當時

南西風なりし故、灰は菅麓の方に降りし。凡そ一箇月を経て東風三日間吹續きしが、蛇田に灰の降りしは東風の時のみにして、其積りし量は前後合せて三寸程なりき。山頂の形状は噴火の爲め變化し菅麓の山は高くなりたり。斯くて七月頃迄は焼け續きて夜は眞赤に見へ鳴動の音をも聞きたりしが其後は次第に静止したり。菅麓の山が高くなりしとは即ち菅麓方面の大有珠岳の生成したることなり。然れども此時此新山の生成したる事實は、斯學者間に今日尙確實に認め居られざるものゝ如し。因て予は更に舊記を調査せしに、安政元年幕府の目付堀織部正に隨ひ蝦夷地を巡回せし某の蝦夷地紀行には「去丑四月十三日一の大山を生ず。やはり此節まで大に焼ける」とあり。榊原銈藏筆記には「宇須山は焼けて嶺半より崩れ二つに分れたり其中央に新に一つ成り出たり」とあり。又和田屋茂兵衛(噴火の際死亡せし茂兵衛の相續人)の願書には「此度新規山出來候に付 其末如何様の變事出來候哉も難計」とあり。由是觀之、當時大有珠岳の生じたるは明かなり。蓋し酸性にして粘性強き熔岩の噴出して固結したるものにして、明治四十二年四月樽前山に生じたる熔岩山と同種のものなるべし。而して此熔岩の噴出を榊原銈藏筆記によりて四月十三日とすれば、噴火の初日なる三月十五日を距ること二十八日目に當れり。尙山容の變化を知らんが爲め、有名なる畫家谷文晁が文化元年著したる日本名山圖會に載する所の有珠岳の圖と、明治四十年の形とを比較せんに、日本名山圖會に載する所は寛政十一年文晁の一族なる谷元旦が蝦夷地巡行の時寫したる圖に據りしものにして、固より大體の形を寫せしに過ぎずと雖も、其山頂に小有珠岳のみありて、大有珠岳なきが如き、之を後の圖に比較して異なる所あるを知るべし。

噴火前の地震は川又專太郎氏の談によれば、蛇田にては噴火の當日八回ありし由、尙其前に地震ありしや否や念を推して聞かざりしが、其後有珠の老アイヌの語る所によれば、噴火前幾日間も地震ありしと云ふ。

明治四十三年の噴火

嘉永噴火の後五十七年にして明治四十三年の噴火あり。此時の噴火の狀況は

既に詳細に知られ居るが、其大略を記すれば、七月十九日一回の微震あり。二十一日小鳴動を聞き、二十二日より地震次第に増加し、伊達村に於て同日二十五回、二十三日百十回、二十四日三百十三回、二十五日百六十三回の地震を感じ、其内強震少なからず且つ凄絶なる鳴動併發し、附近の人民は他へ避難せしに、二十五日午後六時頃より地震は稍々沈靜の狀況を呈し、午後十時頃に至りて有珠岳の西北麓なる金比羅山爆裂し、爾後有珠岳の北側に於て十月二日迄に爆裂せるもの無慮六十箇所に達し、其内稍々顯著なる火口三十餘を算せり。而して其火口は何れも大ならず、噴出物亦少なく、其内熱泥を噴出せしもの七箇所ありしも泥の大部分は洞爺湖に流入したり。更に注意すべき現象は、有珠岳の北側、東丸山より金比羅山に達する大裂線にして又此裂線に直角をなす數多の龜裂あり。而して此大裂線は實に主要の各火口を連貫するものにして、八月三日頃は尙ほ顯著ならざりしが、同月六日より七日に亘り大鳴動と共に、其北側即ち湖畔に面する部分著しく隆起して一大斷層を生じ、尙其後變動ありて甚だしきは數百尺の隆起をなせし所あり。隨て湖畔も概して幾分の隆起を見たるも亦却て陷沒したる所なきにあらず。要するに此度の噴火には此斷層を生じて各所に小火口を開きたるが爲め、噴火の勢甚だ猛烈ならざるを得たり。詳細は當時調査の爲め出張したる大森博士其他諸氏の調査書に就て見るべし。
